

高山の文化を高めた人々 58

飛騨をこよなく愛した風狂の詩人

西村 宏一

林 格男



平成10年丹生川村史編纂室にて(後ろ右 西村さん)

平成二十一年の秋、飛騨の人と自然をこよなく愛した、風狂の詩人西村宏一さんが、私たちに黙ってこの世を去って行った。独り、次の一句を遺したままで。

梁上の塵は

花屑の散りし跡

西村さんは、昭和五年の夏、父君の勤務地大垣市で生まれたが、西村家の菩提寺は京都五山の第二寺相国寺で、幼いころから「忍さん」(後の相国寺管長梶谷宗忍師)・「宏さん」と呼びあう仲の人がいて、坐禅や托鉢とともにしたり、同寺の老師たちから機があらば面授の形で、禅の思想や禅の文化を学んだ。

こ相国寺で育まれたに違いない。

西村さんは大垣一中から金沢の四高を経て、京都大学の経済学部へと進むが、その間、学徒動員、大垣大空襲、日本軍隊の非情、四高時代の親友三人の自殺、自らの結核の罹病等々、数々の厳しい現実に遭遇した。

しかし、西村さんは生来の強靱な気力をもってそれらの苦難を克服して、大学ではドイツ語やフランス語の原書を通して、西欧の文学をむさぼるように読み、そこで身につけた語学力はけた外れで、大阪ではフランス語のオペラの翻訳に立ち合い、高山ではある病院のカルテを翻訳して裁判所の法廷へ提出している。

しかし、大学を出た西村さんは、大阪御堂筋のとある大商社に入社したものの、

鈴懸並木

商人は性に合わざりき

と、三年余りで退社し、昭和三十二年、その足は英語教師として、飛騨の古川へと向かうのである。

ただ、西村さんは大阪時代に、現代詩の寵児谷川俊太郎を知って、生涯「我は詩人なり」と自称して生きる端緒をつかんでいる。この時代は、西村さんにとって大切な時代でもあった。

山好きが先か仕事が先か。西村さんは最初の赴任校吉城高校で、全日本高等学校登山競技会の事務局長を務め、その後、高校登山部・スキー部等の顧問も務め、高山へ転居してからは同志を募って



山が好きだった西村さん(左下) 平成3年 飛騨民俗の会立山詣で

御用留・高山町会所日記等々を解読し、西村さんがワープロで打って自ら製本した古文書類の冊数は四十数冊に上っている。

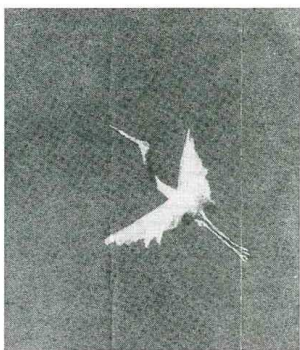
西村さんの飛騨文化発展に対する深い想いは、劇団・高山市民劇場の結成にも表れている。

「三斗会」(酒を三斗飲む)なる会を結成して、定期的にあちこちの里山へ登り、句会などに興じて酒を飲んだ。

西村さんの詩業は、まず昭和四十八年『飛騨戦後詩史』の編集に始まり、同五十二年、高山の詩人和田仁太郎・虎澤勇治両氏を説いて詩の結社を結成し、二十八年間にわたって詩誌『すみなわ』(季刊)を発行。一〇〇号に達した時に、一応の終止符を打った。

その間、西村さんは自分の詩集を六冊、散文集二冊を出版している。

また、高山工業高校の校歌の作詩、『代情山彦著作集』の編集、田島春園『斐山語草』の再編、郡代豊田藤之進の書簡集(筑波大学所蔵)の解読などを手がけ、晩年には高山陣屋御用場日記・同町廻り日記・同口留方



高山市民劇場 第1回公演「夕鶴」挿絵

都市に市民劇団が一つもないことを嘆き、昭和五十二年から元劇団員の森野宏・神出尚・北村淳三氏らに働きかけ、翌年、早くも新劇団によって「夕鶴」が上演された。

西村さんも、「本郷村善九郎」(補作)、「海鳴り」(主人公上木甚兵衛)の脚本を書いて劇団の発展に力を注いでいる。

病不治と

告げられてゐて蠅払ふ

西村さんは、十年ほど前からC型肝炎であることがわかっていたが、平成十八年五月、癌への移行がはっきりして、手術を受けた。

その後、三年間に四度入院を繰り返し、五度目に、ついに帰らぬ人となった。

事実上西村さんの遺稿となった句集『醒々著』は未完成であるが、最後の句は

夏草を四五本

抜きて客去れり

なんとも判断の難しい句である。

西村さんは宿題をたくさん置いていかれた。「醒々著」(油断するな)と言いながら。